

往來停止と成りたり。といへり。三州志來因概覽附録に云ふ。石川門の名は、石川郡に向ふ門と云ふ義成るべし。此の門名の初見は、承應の頃白鳥堀へ溺婦あるより、石川門内妄りに往來を禁ずと見ゆれば、此の頃よりの事ならんといへり。平次按ずるに、此の門名はさる晩年の事に非ず。慶長の古圖に、既に石川門と載せられたれば、河北門と同じく藩祖利家卿入城の初めより稱し來れる門名なるべし。

○挿頭花、松

此の松は、石川門外にあり。白鳥堀の堀縁に植ゑたるをいへり。三州志來因概覽附録に云ふ。かざしの松は、向山より石川門脇を見下すが故に、微妙公の時篠原織部に命ありて植ゑさせらる。此の時篠原は、用人を勤め居たりと。金城深秘録には、白鳥堀縁かざしの植物は、利長卿御用人篠原織部被申上、被爲植候。松木也。此のかざしなくては、一本松の山等より石川御門出入あらはに相見候故也。是も陰陽和合の繩敷。若し松大風にて根返り、或は朽ち折れなど候へば、代り木被爲植替。紺屋坂にも松有之儀、かざしの植物右同様也。といへり。今按ずるに、天明の頃まで

は、紺屋坂にも、さる松樹を植ゑしにや。倭訓栞に、かざしは挿頭花をよめり。髮刺の義なるべし。康保三年三月花宴。藤伊尹奉詔。折花挿玉卿頭。と見ゆ、體源抄に、舞人著冠。必有挿頭花。用其時花也。と見えたり。又かざすは韓文に鬢長袖と見ゆ。かざしと休用の辭、今も扇をかざすなどいへり。凡て物のかけを求むる意ありとぞ。平次按ずるに、かざしの松も此の意に出でたる名なるべし。従前は巨大の老松數株繁茂して、風景殊に能かりしかど、廢藩の際伐木して、今古木は纔に残れるのみ。此の松舊藩中は、登城人の鎗をたて掛け、俗に鎗かけ松と呼べり。

○白鳥堀

此の堀は三、丸石川門脇より新丸尾坂門の邊迄連続せる壑なり。白鳥堀と云ふ名義の來由、未だ詳かならず。或は曰ふ。従前は此の堀へ、白鳥來て居止りける事折々あり。若しくはさる由縁を以て呼びそめたるならんか。平次按ずるに、小松城にも、白鳥堀と云ふ稱あり。此の堀の名は、利常卿の時白鳥を放ち置かれたるゆゑの名稱ならんか。明暦元年九月田井村五兵衛の書簡に、小松御城廻り堤に御はな

しかひ被成候白鳥、當地湊廻りへ來居候間、右白鳥取申事、堅く御停止之旨被仰出。とあり。さればおもふに、改作所舊記に載せたる寛文三年六月算用場よりの達書に、御城中に白鳥御はなし置くに付て、切々湯端へも參申處、頃日一羽見ゆ不申。定而湯端之者共網にて捕申様被存候。急度吟味可致云々。とありて、此の頃參議綱紀卿入部の初め、金澤城内に白鳥を被飼置よしなり。金澤城の白鳥堀は、それより以前既に白鳥堀と呼びたりしか、若しくは寛文頃より呼びそめたるならんか。追考すべし。

○水門

金城深秘録に云ふ。鍵留足輕番所向、水御門と云ふ。昔蓮池より此御門臺之上竈にて、石川御櫓下石垣の中に埋樋有之。是より鶴丸・二丸へ上りたり。右竈相止み、いつの比よりか、只今の通り埋樋に相成候哉。竈は、寛永年中と相見ゆ、埋樋は甚だ宜しき工夫、大事の事なれば左もあるべき事也。右埋樋、明和の頃か功者なる棟梁大工夫して、丸松木二間餘も有之を繰り抜き、水を通したり。誠に大なる工夫、末々御盆に相成る。といへり。今按ずるに、石川

門前の往來は、左右堀にて、所謂土橋の如く也。此の地下は悉く埋樋ありて、辰巳用水をば此の埋樋にて城内の堀共へそゞげり。此の用水は、三壺記に、寛永九年の夏、小松町人板屋兵四郎と云ふ者、算勘の上手なるにより、此の者へ測量を命ぜられて、犀川の川上辰巳と云ふ在所より、山の根を掘り廻して小立野へ水をあげ、埋樋にて所々へ水を取る事と成りたるよし見ゆたり。但し元祿十一年涌波新村百姓四郎兵衛の書付には、寛永六年に辰巳御水道出來仕る。とあり。尙巨細は下條に載す。又按ずるに、三州志鍵囊餘考に、文祿元年壬辰二月國祖西親、世子に命じて尾山城の石壘を築かしめ、小立野の方山腰を斫り抜き、地底に陰樋を設けて、水條を引通す。とあり。右は如何なる書に據りたりけん。菅家見聞集に、文祿元年堀を掘切り、小立野の方との間をすかし、水を懸入れ、其澤を金澤と云ふ。と見ゆ、三壺記には、此の時迄かきあげの城形なるを、山城に取立て惣構・一二の曲輪、本丸の廻り堤を掘被成けり。とありて、地底に陰樋を設けて、水條を引通したる事は見ゆず。

○辰巳水道

門前の往來は、左右堀にて、所謂土橋の如く也。此の地下は悉く埋樋ありて、辰巳用水をば此の埋樋にて城内の堀共へそゞげり。此の用水は、三壺記に、寛永九年の夏、小松町人板屋兵四郎と云ふ者、算勘の上手なるにより、此の者へ測量を命ぜられて、犀川の川上辰巳と云ふ在所より、山の根を掘り廻して小立野へ水をあげ、埋樋にて所々へ水を取る事と成りたるよし見ゆたり。但し元祿十一年涌波新村百姓四郎兵衛の書付には、寛永六年に辰巳御水道出來仕る。とあり。尙巨細は下條に載す。又按ずるに、三州志鍵囊餘考に、文祿元年壬辰二月國祖西親、世子に命じて尾山城の石壘を築かしめ、小立野の方山腰を斫り抜き、地底に陰樋を設けて、水條を引通す。とあり。右は如何なる書に據りたりけん。菅家見聞集に、文祿元年堀を掘切り、小立野の方との間をすかし、水を懸入れ、其澤を金澤と云ふ。と見ゆ、三壺記には、此の時迄かきあげの城形なるを、山城に取立て惣構・一二の曲輪、本丸の廻り堤を掘被成けり。とありて、地底に陰樋を設けて、水條を引通したる事は見ゆず。